

昭和39年度
(1964)
第4回大会

男子優勝 札幌南

女子優勝 小樽緑陵

(現 小樽商業)

【 専門委員長 寸評 】

団体戦においても個人戦においても技倆は非常に伯仲した試合が多く、全体の技術の向上が伺われて大変心強く感じた。しかし、選手の層が薄く、ごく限られた選手同士の間においてはお互いの技術を十分に知悉しているため、勝敗の帰趨を静めているように思われ、粘りの足りないように思われる者も見受けることもあった。しかし、殊に女子のレベルの向上してきていることは誠に喜ばしく思われる。この種目の参加校がより一層増え、試合数が増して全国のレベルにさらに近づく日を期待する次第である。

全国大会

(男子)

団体戦の1回戦は愛知県代表の桜ヶ丘高校。善戦するも3-0で敗退す。

個人戦のダブルスは各組とも1回戦で敗るるも、シングルスは三嶋が1回戦で大分県代表を破り2回戦に進出し、優勝候補の筆頭法政二高の浅田に敗れる。五年ぶりの2回戦進出は大変喜ばしいことであるが、やはりダブルスにおいて試合不足を痛感した。

(女子)

いずれもあと一步の力量不足。地域的なレベルの低さは否めない。それから技術以前の問題として、暑さに負けない訓練、試合前と試合中に水を飲まずに戦い通す訓練の必要を痛感。

(専門委員長 相原 嘉正)

優勝のよろこび

男子 札幌南高等学校

われわれ南高等学校硬式庭球部は今年も北海道高等学校庭球選手権大会を目ざし、春か

ら猛練習をしてきた。そして6月27日に札幌第一、小樽潮陵を破って決勝に進出し、決勝でも札幌東を破り、ついに優勝を手にしたのである。

私は優勝するのは当然だと確信していた。なぜならば、われわれはそれだけの練習をしてきたからである。

われわれのテニスクラブは今年から学校にコートがなくなり、春から中島のコートを使用している。土・日曜は使用できず、平日も午後5時までと、コートを思うように使えないのだ。

それだけにその短い時間に身を人れて練習をしなければならなかったのだが、その練習の成果が6月の選手権大会の優勝という形で現れたのだった。

今年入った部員も来年は自分達の手でと張り切って今も練習に励んでいる。

優勝のよろこび

女子 小樽緑陵高等学校

優勝の喜びも大分薄れて、来年の事を語り合っている今日この頃、「優勝の喜び」といわれてもピンときません。あの頃の私達はテニス、テニスに追われて、帰途につくのはいつも8時、9時近かったように記憶しています。一面のコートで部員1年～3年までが練習をするのですから、私達も思い通りの練習が出来なくて、ずいぶん悩みました。しかし、部長をはじめ部員の協力により念願通り去年に引きつづき優勝を勝ち取ることができ、努力が実ったという満足感で一杯でした。

しかし、その後名古屋で開催された全国大会においては、他の地方の人々との差を認めないわけにはいかないような結果でした。もっともっと努力し、一步でも他のチームに追いつくように、また、3連覇を目指し来年も頑張りたいと思います。

優勝の喜びよりも来年の抱負のようになりましたがこれが部員の本当の気持ちです。